

足立区立 郷土博物館 だより

2023

No. 77

現地がいちばん

現場に足を運んで学ぶ、フィールドワークの重要性は、美術史学・歴史学・民俗学の三分野共通です。博物館でも、館内で資料を見たり文献を読むだけではなく、現地に足を運び、観察し、ときには人に話をうかがい、新しい資料や情報を手にするフィールドワークは、調査研究において欠かすことはできません。今回は、それぞれの分野のフィールドワークの一例と、そこから得られる情報についてご紹介します。

特集

現地に行って、観察する

フィールドワークは楽しいよ

現地ではなくては わからぬこともある

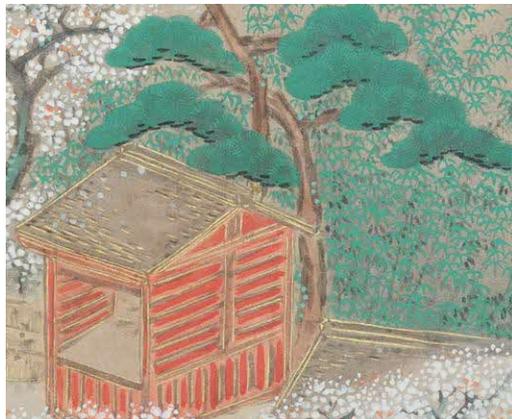
美術史学

現物を観察し、 背景を探る

特定の作品やその作者について研究する美術分野では、対象とする作品が保管されている場所を訪ね、現物の細部を観察することが重要なフィールドワークであり、調査・学習の第一歩となります。

近年、カメラや印刷・デジタル技術の向上により、書籍・画面上で芸術作品を見る環境は整えられています。詳細まで見ることができるようになりますが、やはり、細かな彫刻の構造、絵画の筆致、浮世絵の彫・摺の技術など、現物を間近に観察しなければ、それを正確にとらえて実感することはできません。

例えば、平成26年(2014)に千住の名倉家で確認され、その後、区に寄贈された建部巢兆の「吉野山桜・竜田川紅葉図屏風」を見てみましょう。桜の咲く吉野山と、紅葉の色づく竜田川の情景を描いた



上：吉野山桜図屏風の一部
輪郭線に施された金泥と、細かに描かれた竹・松の葉

下：竜田川紅葉図屏風の一部
一本一本が描き分けられた稲穂

六曲一双の屏風ですが、各図を精緻に観察すると、全体に群青、緑青、金泥といった高価な顔料が使用されていることがわかります。その上、建物や人物の輪郭には金泥で線が施されているほか、鮮やかな緑の松や竹の葉は緑青でわずかに厚く、こまやかに描かれ、畑の稲穂は金と茶で一本一本が描き分けられるなど、精緻密な技法が随所に駆使されていることが見て取れます。こうした細部の情報は、全体像を示した図版からだけでは確認し難いものです。かといって、拡大した画像ならばよいかというと、やはり顔料の濃淡、筆の運びなどの細かいところまではわからないのです。

この作品は元々、南千住の材木問屋からの依頼で作されたものですが、こうした観察から高価な顔料の

使用を可能にする依頼者の十分な出資のもとに、巢兆がそれに見合う技巧を尽くしたという、制作の背景が浮かび上がります。さらに、観察から得られる特徴や技法一つ一つへの気付きが、「作品を知る」楽しみへと繋がるのです。美術作品の調査研究は、それがたとえ外国であっても実物の作品を見に行くことから始まります。

この作品現物への観察を第一のフィールドワークとするならば、作者自身やその周辺の人々への聞き取りと、関連する諸資料の収集によって、作者の情報や、その作品が生み出された状況、地域的な特徴、作図がどのように用いられていたのかといった情報を集めることが、第二のフィールドワークとなります。

地域の美術文化を取り上げてきた近年の区の文化遺産調査も、こうしたフィールドワークが、欠かすことのできない重要な土台となっています。

歴史学

「史跡探訪」が 研究を深めます

歴史を語るフィールドワークの代表例が史跡探訪です。文献で得られる情報や、さまざまな研究史を踏まえて、現地を訪ね考ええるという伝統的な手法で、古くは江戸時代から行われていました。ここでは文献とともに、史跡と周辺の観察から検証する実例をご紹介します。

武士館（やかた）の典型の一つが、方形居館（ほう

けいきよかん）です。足立区佐野にある「佐野いこいの森」は、近世初期、代官伊奈氏の家臣だった佐野胤信の屋敷跡で、上空から見るとほぼ正方形の形の土地に、土塁や堀をめぐらせ、内部に家屋などの建物がある典型的な方形居館です。佐野家の事績は佐野家文書や他地域の古文書で知ることができ（当館蔵）、論文や研究書にも取り上げられていて、重要な史跡として知られています。しかし、古文書が伝えるのは歴史の一部にすぎず、現地に行かないとわからないことが数多くあります。

屋敷の目の前が中川です。まず「なぜ、ここに立地したのか？」という疑問が浮かびますが、古文書には記されていません。ところが現地に行くとき多くのことが見えてきます。戦前にできた中川水門の水位計を見ると東京

湾（江戸湾）からの潮の満ち引きにより、時間によって水位が変わることに気づきます。このため、上げ潮を利用して船が安定して遡航することができるとです。佐野家の古文書を見ると肥料運搬船を運



昭和33年（1958）の佐野家の屋敷1町（約109m）四方の四角形という方形居館。中川（右側）に接する。

用していることから、この土地を活用していたことがうかがえます。

次に立地場所の地形を考えます。自然堤防は河川が運んだ土砂によってできた微高地で、比較的水害に強いという特徴があります。佐野家の屋敷は中川の自然堤防上にありました。いまは自然堤防の形跡は失われていますが、幸い足立区役所が昭和時代に作成した50cm等高線の手作り地図があります。本図をみると佐野の昔の集落が、自然堤防上にあったことが確認できます。こうした地理的な要因から、屋敷がなぜここにあるのかという問いの答えは明らかです。つまり「舟運に便利で、さらに安定した微高地であるから」なのです。

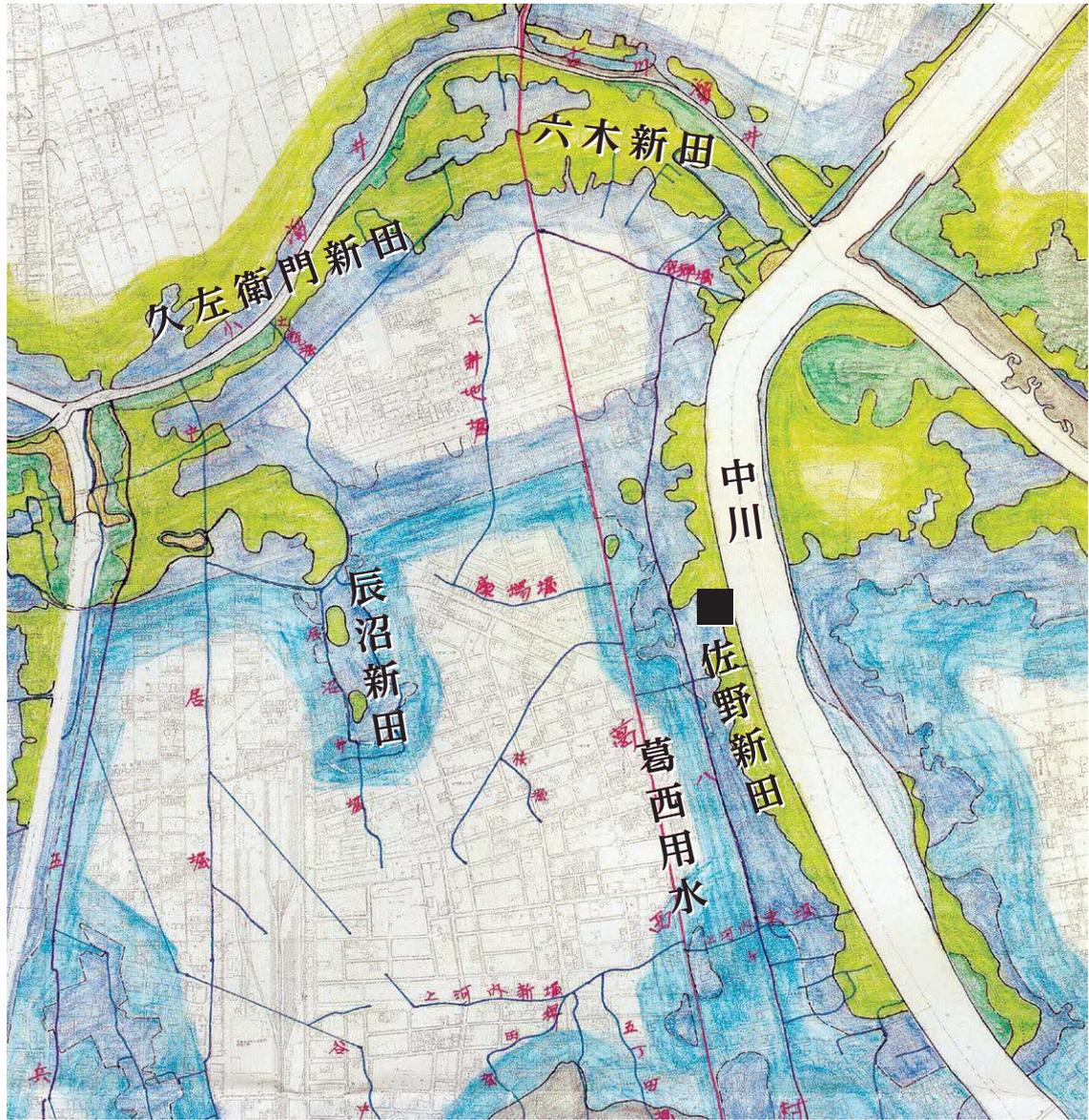
佐野家の屋敷ができた当時、中川は交通の大動脈でした。初代当主の胤信は伊奈氏の役人として遠州（静岡県西部）や相州（神奈川県）に出かけましたが、舟運を考えると格好の立地条件といえます。

こうした現地調査を合わせて、その歴史の理解が可能になるのも、フィールドワークの大きな成果です。

民俗学

フィールドワークが 基本です

民俗学のフィールドワークというと、祭礼や石碑類など屋外にあるものを見学して調査する、というイメージがわかりやすいかもしれませんが、しかし、民俗学のフィールドは、「屋外」だけとは限りません。体験者の生の知見や記憶を聞き取るために、現地に出かけ



50cm単位の等高線図 足立区北東部ほか

緑色は自然堤防を含む微高地2m~2.5m

青色は氾濫平野を含む平坦地2m以下

白色は青色などの着色を省略した場所

■印=佐野家屋敷

近世初期の新田名などを加筆した

ることも「フィールド」です。日記や祭礼記録、石碑に刻まれた記録などの文字資料をもとに、調査研究することも進んでいます。民俗学の調査は、やはり聞き取り調査が基本といえます。

昨年、東京都指定無形民俗文化財に指定された「じんがんなわ」の行事についても、現地での聞き取り調

査は不可欠でした。「じんがんなわ」自体を実際に見ることはもちろんですが、いつ、だれが、どのように、どんな意味があつて、というような5W1Hはもとより、藁へびを掲げる場所の時代による変化など、実際にかがわないとわかりません。

藁へびを掲げ厄除とする行事は、埼玉県、千葉県の



住居についての聞き取り調査

近隣に限らず全国的にも同様に見られます。こうした行事は、自分たちの暮らす空間に魔や厄を入れないように、集落境と認識される場所に魔除けのツクリモノを掲げる「道切り」や「辻切り」とよばれるものです。区内での伝承とは別に、広い地域を視野に入れた事例や、これまでの先行研究のなかで考えることも大切です。

さて、人に話を聞くためには聞き取りの技術や経験が必要です。「何を質問すれば調査したい事柄がわかるのか?」それには事前に多くの知識が必要なのです。矛盾するようですが、実は「わからないことは質問できない」のです。聞き手にベースとなる知識がないと、効果的な調査になりません。また、話を聞きながら次の質問を考える(場合によってはメモもとりながら)というのは、なかなか難しいものです。

文字記録には残らないけれど、地元で大切に伝えられているものはたくさんあります。そのような人々の信仰や生活慣習は聞き取り調査によって掘り起こされ、地域の文化としての研究が深まるのです。

施

設の改修と 展示リニューアル

昭和61年（1986）に開館した足立区立郷土博物館は、今年で開館37年目を迎えます。

空調設備等の改修など大掛かりな施設改修とともに、常設展示のリニューアルのため、2年間のお休みをいただきます。

■施設・設備の更新

博物館では、展示室や一般の事務室のほか、貴重な資料の保存のために、24時間、一定の温度、湿度を保てるように設定された収蔵庫があります。築後30年を超えたため、今後不具合のないように空調機械や配管などを大幅に入れ替えます。また近年、美術資料が大幅に増加しているため、資料の観覧に適した展示ケースを整備します。

そのほか、建物の雨どいや、屋根の修繕、扉や床など、施設の老朽化に伴い劣化している部分を修繕し、今後30年以上施設の活用ができるように大幅な改修を行います。

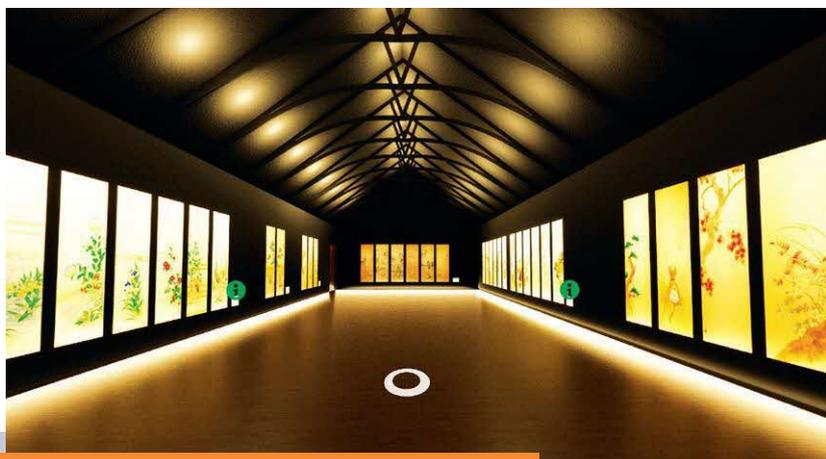
■常設展示のリニューアル

常設展示は、開館から20年を経た、

平成21年（2009）にリニューアルし、「江戸・東京の東郊」をテーマに、歴史・民俗的に江戸時代以降の足立の歴史を紹介しました。

区制80周年記念を契機に、平成24年（2012）から本格化した文化遺産調査では、多くの美術資料が発見され、足立の歴史を新たに美術文化史的な視点からとらえることができるようになりました。特別展では、その成果と新発見の美術資料を発表してきましたが、

今回のリニューアルでは、これまで収蔵してきた美術品を常設展でもご覧いただくとともに、美術文化史面の足立の地域的特徴を知っていただけるコーナーを新設します。



電子展覧会

休館中は電子展覧会で展示を行います。ホームページから観覧可能。



博物館の休館と活動

令和5年1月から、施設の改修とリニューアルのため休館しています。今回の工事は、博物館内の資料やすべての物品を移動させて行うため、6月には、博物館事務室も「学びピア21」（千住5-13-5）、中央図書館の上階に移転します。

工事の終了は令和7年3月を予定しています。この期間、常設展示はもちろん、特別展や企画展の開催はお休みします。

また、付属する東漕江庭園の公開や、臨瀟亭の貸し出しも休止となります。収蔵資料の貸し出しや、観覧もできませんのでご了承ください。

休館期間	令和7（2025）年 3月まで（予定）
休園	東漕江庭園、臨瀟亭
休止	資料の特別利用（閲覧・貸出）、博物館実習・職業体験 お問い合わせや、学習相談などの対応は可能です。
講師派遣	令和5年5月～6月は事務室移転のため休止します。
博物館事務室	電話受付 8：30～17：00 土曜日、日曜日、祝祭日、年末年始は休室です。
刊行物の販売	博物館の展示図録など刊行物は、足立区役所区政資料室で販売しています。また、博物館ホームページで刊行物・グッズの紹介をしています。郵送での販売もお受けしています。

足立区立郷土博物館だより 77号
令和5（2023）年3月発行



足立区立郷土博物館
ADACHI CITY MUSEUM

〒120-0001 東京都足立区大谷田 5-20-1
☎ 03-3620-9393 / e-mail hakubutsukan@city.adachi.tokyo.jp
URL = <https://www.city.adachi.tokyo.jp/hakubutsukan/>

